

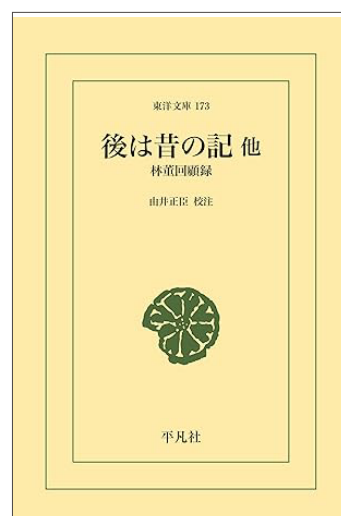
冷静な明治外交官 — 林董『後は昔の記 他』 —

佐倉はJR・京成と二本の鉄道があるにもかかわらず両駅前はしょぼく、かつての城下町は繁栄から取り残されている。石垣のない土塁仕立て城跡は民博になり、かつての佐倉繁栄を語るものは少ない。けれども、ここは幕末老中堀田侯をはじめ医学・美術・教育と多くの人材を輩出している。(菊地実)

佐倉が生み出したもの

旧世代は元祖農民一揆佐倉惣五郎。私の世代だと巨人軍長嶋茂雄選手。学生時代初めて佐倉に行ったら「ここが長嶋選手実家」と学友から紹介された。佐倉で驚いたのは女子美術大学で教鞭をとっていた時代。講師になって「女子美手帳」をもらったら、女子美開設間もない1902(明治35)年に経営難に陥った際、佐倉順天堂の第三代堂主・佐藤進の夫人である佐藤志津(林董の義理姪)が校主となり財政援助を行って女子美再建に尽力したとあった。加えて初代軍医総監松本良順(林董実兄)はじめ、多くの人材が出ている。

本書は初代英国「大使」として日英同盟に尽力した「林董回顧録」で三部構成<図表1>。一番知られているの



<平凡社東洋文庫>

は『後は昔の記』だが、『回顧録 自叙伝』の方が若い時代を書いており参考になる。また新聞掲載中止になった『日英同盟の真相』では、長い交渉過程がよく分かる。

<図表1>本書の目次

I 部 『回顧録 自叙伝』

昭和八年 林家から旧幕の同人誌『同方会誌*』に掲載
* 江戸を生き、明治をつくった旧幕臣たちが先祖と
自らの足跡をまとめた記録集
明治29年から昭和16年にかけて全65号刊行

II 部 『後は昔の記』時事新報社 B6 256頁

(口述を記者が筆記 明治四十二年九月～翌年)

III 部 『日英同盟の真相』

(口述で記者が筆記 大正二年七月十三日から時事新報で連載したが、外務省から掲載中止を命ぜられた)

英語使いの人世

「一身にして二生を経る」は福沢諭吉の幕末から明治にかけての評である。開国、尊王攘夷、幕府崩壊、内国戦争、文明開化と政治・社会・風俗の全てが激変した。江戸末生まれで明治に活躍した多くの人が、これを体験した。林董の人世も諭吉翁いうところの「二生を経る」の最たるものである<図表2>。

但し、林について回るのは幕末の代表的蘭学医佐

藤泰然という開明的で優れた父親のもと、開国の新開地横浜で学べたということであろう。兄弟・親戚と、周りは海外体験の多い特別な家柄だった。上海帰りのリルではなく、米国帰りのジョゼフ・ヒコ（浜田彦蔵）を始め、ヘボン夫妻ら*1に語学を習ったことが転機となった。その後は幕府英国留学生となり、明治に入ってから伊藤博文に直談判し米欧使節団通訳（書記官）として活躍。この語学達人にして、「翻訳間違いで誤解が生じた」と書いている（188頁）。そういえば後輩に当たる幣原喜重郎も、何度も語学を習い直したと書いている*2。

初代香川県知事

前号本連載の『帝国大学』でも書いたが、官僚制が未成熟で工部省から通信省、さらに地方知事を経て外交官になるのは官暦二十年目の明治二十四年、外務次官となる。現在の官僚制では考えられない、若き明治＝＜坂の上の雲＞の姿である。

- 「工部大学校の教授方法は、学問詰込流は避けて、実地経験を目的とした・・・文部省の当局者は大いにやっかんで・・・」（192頁）
- 香川県は明治維新以来、名東県（徳島と合併）、ついで愛媛と合併し、林が初代香川県知事。「讃岐松平家は水戸徳川の連枝で、四隣の藩に対して倨傲の態度」（232頁）、「山林乱伐」「砂糖問屋九軒で廃藩置県時六十万両民間にあった・・・三名の県令は処置すべき方なく、前任白根専一氏は、剛情なる問屋を訴える・・・」（235頁）。
- 兵庫県知事時代は天津事件の記述が多く、いかにこの事件が日本中を震撼させたか窺える。さらに「地方官の破廉恥」（227頁）「知事と鉄道株」

＜図表2＞主な経歴

嘉永3年（1850年）	下総国佐倉本朝 佐藤泰然の第五子として生まれる
文久2年（1862年）	横浜へ移住、ジョセフ・ヒコに英語を習う
慶応2年（1866年）	幕府英国留学生として英国へ
---＜慶応3年10月14日（1867年11月9日） 大政奉還＞---	
明治元年（1868年）	帰国命令、榎本武揚とともに函館に向かう
明治2年（1869年）	弘前藩お預け禁錮
明治3年（1870年）	牛込早稲田の明治義塾英語教師 10月米国公使通訳
明治4年（1871年）	兄・松本良淳の紹介で、陸奥宗光、次いで伊藤博文に会う 9月神奈川県奉仕出仕 10月岩倉具視使節団の随員二等書記官
明治6年（1873年）	御雇い外人を伴い、帰国 6月工部大学校設立に従事
明治15年（1882年）	露帝戴冠式参列の有栖川宮に随員、大書記官
---＜明治18年 工部省廃止に伴い、通信省に移行＞---	
明治19年（1886年）	通信省駅通局長
明治21年（1888年）	香川県知事（初代）
明治23年（1890年）	兵庫県知事

明治24年（1891年）	外務次官
明治28年（1895年）	清国公使、10月男爵を授爵
明治30年（1897年）	駐露公使
明治33年（1900年）	駐英公使
明治35年（1902年）	日英同盟協約調印、2月子爵に昇叙
明治38年（1905年）	駐英大使
明治39年（1906年）	外務大臣（第一次西園寺内閣）
明治40年（1907年）	9月伯爵に昇叙
明治41年（1908年）	外務大臣辞任
明治44年（1911年）	逓信大臣（第二次西園寺内閣）
大正元年（1913年）	逓信大臣辞任
大正2年（1913年）	葉山にて死去

（229頁）や「官の工事現場・・・賄賂は」（230頁）と、時代劇風な活写をしている。

人物評の率直さ

明治二十四年露皇太子事件後処理も含めて、林は外務次官に就任後、半生を外交官として過ごす。ただしこれ以前も、通訳書記官として外国に赴いている。

幕末から明治初期、英国世界覇権を傘にきてゴリ押しした英公使パークスについて「日本にては飛ぶ鳥も落ち

る勢にて、本国の待遇もさぞかしと思いたるに。英外務大臣と談判の時は末席で・・・真正の位階姓名も大臣に知られざるくらいで、楽屋がわかりて大いに器量を下げたり」としながら、パークスを「ある他の公使等の如く、地位を利用して自身または知人のために私を営める跡なし」(182-183頁要約)と公正さを評価している。

また次官として使えた陸奥宗光伯が常に「外交よりもっぱら内向に注意したるにより、条約改正を成功するを得たり」(250頁)は、明治最大の課題であった条約改正のみならず外交の基本要件かもしれない。

日清戦争直後の三国干渉は、蘇峰に代表される「臥薪嘗胆」という厄介なナショナリズムを生み出した。しかし三国干渉は開戦前から英国より、また明治二十八年から英タイムス通信員から「予期せり」としている(261頁)。その他日清戦争後の清国公使、駐露公使時代の人物評もさることながら、人物評の白眉は外務次官として使えた最初の外務大臣・榎本武揚評であろう。これは本書校注者由井正臣先生が解説で取り上げている。

「榎本氏は漢学者流主義の人にて、正直律儀なる性質なれば、其道を持ってする者には容易く欺かるる事多く、一度人を信用すれば、その人の書言は是非の分別もなくこれを要る。朋友としてはこの上もなき人なれども、官吏としては共に事を執るに困る人なり」(66頁)。箱館戦争大将というよりも、＜武揚夫人が林董の妹＞という親戚の評である。科学者としての榎本武揚。シベ

リア横断としての武揚は軍人・外交官失格だったのであろうか？

人間通としての外交官

駐露公使時代の筆にも、観察眼の鋭さを感じる。明治三十年七月、獨帝露都訪問歓迎会における離宮での音楽舞踏の壮大さと演出に感心している(282-83頁)。露国の出版物検閲は・・・「本来の目的とは反対の制度を生む」(285頁)と予見。また本書の範疇ではないが、外務省後輩に当たる原敬への書簡で、ロシアの宴会の豪華さを書く一方で、本質は「間男間女」とアンナ・カレーニナぶりを批評している。

外交としては、日英同盟の十数年にわたる経緯や明治第二世代(桂・小村・林)が元老を制して調印にこぎつけたかが重要であろう。その意味で言うなら、明治第三世代の昭和「三国同盟」は「崖の下の蜘蛛巣」だったのかもしれない。

本書には百数十人の蘭学生徒の乱暴さ。祖父／庄内人から御家人株を購入、父／蘭方医として横浜移住と、十九世紀には土農工商制度が流動化している様をも感じさせる。

*1:ヘボン博士は忙しかったので、ヘボン婦人に語学を習った。また益田孝、高橋是清もここで英語を習っている。なお、＜ヘボン式＞はローマ字の記述で有名だが、現在風に言えば「ヘップバーン」である。

*2:『外交官五十年』(中公文庫)

■著者/ 林 董(ハヤシ タダス)。1850(嘉永3)年-1913(大正2)年、佐倉(千葉県)出身。明治時代の外交官・政治家。蘭方医・佐藤泰然の子。江戸幕府御殿医・林洞海(姉の夫)の養子。幕府留学生としてイギリス留学後、箱館戦争で榎本武揚軍に加わる。のちに新政府に入り、香川県知事などを経て外務次官となる。駐英公使として日英同盟締結につくした。第1次西園寺内閣の外相、第2次西園寺内閣通信相。最高爵位は伯爵。

■校注/ 由井正臣(ユイ マサオミ)。1933年-2008年。長野生まれ、日本の歴史学者。早稲田大学文学部卒、早稲田大学教授、日本近代史専攻。

■書誌/ 平凡社東洋文庫1970年10月発行